朝鮮の名勝と由来

朝鮮民主主義人民共和国
チュチェ108（2019）

朝鮮の名勝と由来

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ108（2019）

序

朝鮮は津々浦々が景勝に恵まれて、古くから「三千里錦繍江山」と称されてきた。

太古の昔から同じ一つの国土で単一民族として生活してきた朝鮮人民は、麗しい祖国の山河に対する自負と誇りに満ちて、いろいろの伝説を語り伝えている。

絶景と名勝にこもる地名由来の伝説や人々の愛国心・美風良俗を伝える物語には、勤勉で知恵深い朝鮮民族の気質や英知、豊かな情緒が生き生きと表現されている。

本書には、古くから伝わってきた朝鮮の名勝とその地名の由来、それらにこもる興味深い物語のうちの幾つかが紹介されている。

目　　次

伝説と逸話

1. 名山とその名の由来

白 頭 山

朝鮮の両江道三池淵郡の北部に位置する白頭山は朝鮮半島最高の山であり、しかもその雄壮・荘厳さは他の山々に見られない特異な境地をなす、古い昔から広く世に知られた名山である。白頭山は5000有余年の久しい歳月、朝鮮民族と運命を共にして東方の一角に毅然とそびえている。

白頭山は、将軍峰(2750メートル)、嚮導峰(2712メートル)、双子虹峰(2626メートル)、青石峰（2662メートル)、白雲峰(2691メートル)、遮日峰(2596メートル)など2500メートルを越える連峰が空高く競い立って雄壮を極め、それらに囲まれた山の頂にはカルデラ湖天池があることからして、非常に神秘な山とみなされた。朝鮮民族は古くから白頭山を祖宗の山とあがめてきた。

白頭山が朝鮮の名山、祖宗の山とされてきたのは、それが地理学的・地質学的に見て朝鮮半島のすべての山や山脈の基をなすからである。

白頭山の日の出

白頭山のビル峰

白頭山の嚮導峰

白頭山は白頭大山脈の根本・始原である。

延々1470キロメートルに達する白頭大山脈は、白頭山に端を発し、南朝鮮智異山脈の南端、朝鮮南海岸の鳩在峰（慶尚南道河東郡）にまで伸びている。

17世紀初葉の実学者李晬光は『芝峰類説』で、「わが国のすべての山はいずれも白頭山に端を発する。白頭山脈は馬息嶺山脈から鉄嶺を経て南方へ伸び、金剛山、五台山、太白山となり、智異山にて終わる」とし、済州島の漢拏山も白頭山脈に属する山だと述べている。

白頭山が朝鮮の名山、祖宗の山とされてきたのは次に、それを朝鮮民族が国の発祥の地、民族の魂がこも

白頭山の獅子峰

る聖山とみなしてきたからである。

白頭山を祖宗の山としてあがめる朝鮮民族の思想・感情が反映されて、朝鮮歴代の国々は雄壮な白頭山を民族の聖山とみなし、年々ここで祭祀を行うのを慣例化してきた。

白頭山は祖宗の山としてだけでなく、朝鮮革命の聖山として一層の光を放っている。

白頭山は、15星霜にわたる抗日武装闘争を勝利に導き、祖国解放の偉業を達成した金日成（キムイルソン）主席の革命活動史を秘めた山、朝鮮労働党の輝かしい革命伝統の強力な根が張り巡らされた革命の聖山である。

白頭山は金正日（キムジョンイル）総書記が生まれ育った故郷の地であり、代を継いで革命を続けようとの大志と胆力をはぐくんだ地である。

白頭山の名の由来と旧名

白頭山という名は、四季を通じて白雪を戴いている山だということに由来している。

18世紀に編纂された『東国名山記』には、白頭山という名は山頂があたかも白いかめを載せているかのような趣だとして名付けられたと記されている。

朝鮮でこの山を白頭山と呼ぶようになったのは、高麗時代（918～1392年）より以前だと認められているが、そのいわれは、『高麗史』に高麗の太祖王建の祖聖骨将軍が白頭山を遊覧したという記録に基づくものである。

古代には白頭山は「不咸山」と称され、朝鮮はもとより中国でもその名で広く知られていた。

中世に入ってからは白頭山という名のほかに、「太白山」「徒太山」「蓋馬大山」「白山」「長白山」「常白山」など幾通りもの名があったが、これらの名称には概してそれが上空に高々とそびえる、神々しい山だという意味を含んでいる。例えば「太白山」「徒太山」は最高の山、天上の山という意味が、「長白山」「常

白頭連峰

白山」は山頂に年中白雪や氷を戴いているという意味がこもっている。

白頭山天池の旧名

白頭山天池は元来山頂にある深い湖であることから、大昔には「大沢」と称されていたが、数百年前から天池と呼ばれるようになった。天池という名はその存在が天のように神聖で、非常に高い山にある池だということに由来している。

鴨緑江、豆満江、松花江など３大長江の水源である天池は、切り立つ崖を城壁のように巡らし、紺碧の水面に白頭連峰の万物相を映し、変化無双の自然現象を次々に引き起こす、この上なく印象的な風景をかもし

出している。
　朝鮮の先人たちは、白頭山天池のこの神秘なほどの変化に感嘆して、「大沢」や「天池」以外にも「雷沢」「竜潭」「神溢」などとも称した。
　「雷沢」は、天池の激浪が湖畔の崖にぶつかるたびに雷鳴が轟くとして付けられた名であり、「竜潭」「神溢」は、天池の周辺でしばしば目撃する強烈な竜巻に驚嘆し、天池は竜神の住む淵だという意味で付けられた名である。
　天池はその威容と神秘相、壮麗な湖畔の風致のゆえに、白頭山と並んで古くから世に広く知られている。

白頭山天池

将軍峰の旧称—兵士峰

将軍峰は白頭山中の最高峰で、以前は兵士峰と呼ばれた。

『東国名山記』にある兵士峰という名は、天池を抱いてそそり立つ白頭連峰中の最高峰をなすという意味を持つと解釈される。

今では白頭山にこもる金日成主席の不朽の革命業績を子孫万代に末ながく伝えるべく、この峰を将軍峰と呼んでいる。

白頭山の将軍峰

名勝—天平

天平は白頭山麓の樹海を指して呼ばれた旧称である。古文献の資料によると、天平という名は当地の地勢が大角峰と臙脂峰、仙五山、間白山、小白山、胞胎山、冠帽峰などを四方に抱いて数十里もの平地に広がり、鬱然たるその大森林が天空と接する広野のような趣だとして付けられたとされている。

天平は夜が明けるや、東の空にさした陽光が瞬時にして無限の密林を隅々まで赤く彩り、たそがれには小白山側から立ち上がった霧が粛然と立ちこめる情景が雄壮にして深奥な感興を呼び起こすとして、古くから白頭山特有の景勝として知られてきた。

天平は、鹿茸、麝香、コウライキテンの毛皮、野生朝鮮人参など珍しい特産の多いことで特に有名であった。

金 剛 山

16世紀の詩人鄭澈は金剛山の美を謳歌した詩『関東別曲』において、百川洞を巡り万瀑洞に至ると、滝のあまりもの美しさと轟音に耳を聾し、目はまぶしくなる、中国廬山の美を歌った李太白が金剛山を遊覧すれば、廬山が金剛山より優れているなどとはとても言えないだろうとしている。

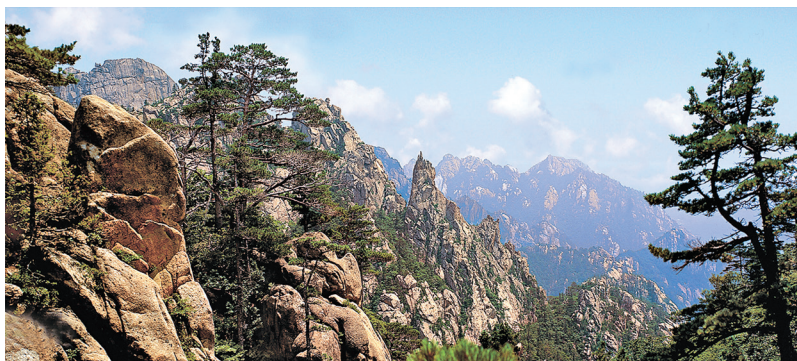
江原道の高城郡と金剛郡にまたがる金剛山は、朝鮮６大名山、朝鮮８景、３神山の一つと称されてきた、朝鮮民族の誇りであり、世界的な名山である。

１万2000峰の名で呼ばれている無数の峰々が千姿万態の世にも珍しい姿を競い、深い渓谷を流れる玉のように澄んだ水や壮快な滝が、美しく珍しい動植物と巧みに溶け合った金剛山の神秘境はまこと、世界のいずこにおいても見られない大自然の奇跡だと言える。

そうしたわけで古くから「朝鮮の金剛山を見ずして山水の美を語るなかれ」という賛辞さえ語り継がれているのである。

近世に入って金剛山は世界に広く知られるようになり、多くの国のツーリストやハイカー、学者たちが訪

金剛山の集仙峰

金剛山の三仙岩

金剛山の勢至峰

金剛山の鬼面岩

金剛山の上八潭

金剛山の万物相

れるようになった。
　金剛山を見た彼らは一様に、「世界的な名山」「世界第一の景勝」「世界的な自然公園」と激賛している。
　その幾つかを紹介しよう。
　「金剛山の美は世界のいかなる名山の美をも超越している。……美のすべての要素で満たされたこの規模の大きい峡谷はあまりにも美しく、人々の心を麻痺させるほどだ」
　（19世紀英国の有名な女性ツーリスト　イザベラ・ビショップ）

　「金剛山の雄大な全景、山容の大胆な構成、切り立つ断崖、未だ斧の入れられていない原始林、汚れのない清い滝、早瀬と深い淵から差し出る光線と色彩の変化……　ああ！　この世のいずこにこれと比較しうるものがあろうか」　　　　　（ドイツのツーリスト）

　「耶馬渓と妙義山、松島の景勝を富士山麓に集め置いても、金剛山の絶勝と較べるべくもないだろう」
（日本のジャーナリスト）

金剛山８天女の伝説

昔、金剛山に働き者の心やさしい若者の木こりが住んでいた。

ある日、彼は山で猟師たちに追われていた鹿を助けた。後日、若者は鹿の恩返しを受け、天から舞い降りた美しい天女の一人をめとり、二人の子を設けて幸せに暮らした。ところが彼は、子を３人持つまでは決して羽衣を出して見せるなという鹿の注意を守り切れず、それを出して与えた結果、妻と二人の子たちと別れる羽目になった。けれども天に舞い戻った天女は、美しい金剛山で若い木こりに出会い、幸せに過ごした日々のことが忘れられず、思い余って地上に降り再会したという。……

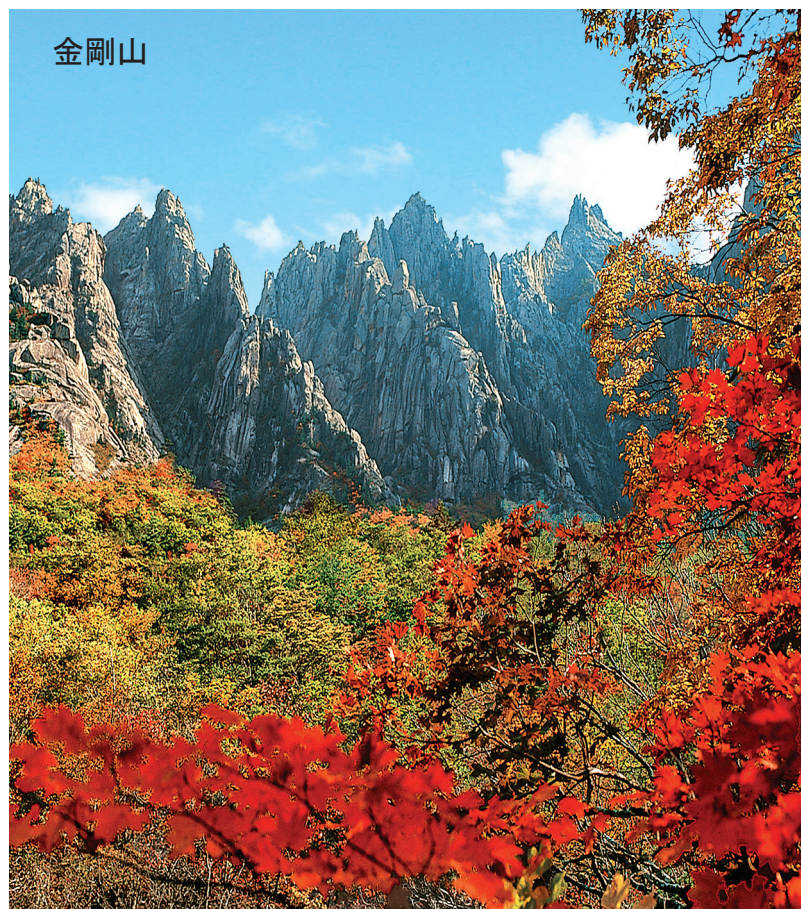
この伝説には、金剛山の美しい景色を、天人の住むという天空の世界と対比し、幸福な生活を夢見る昔の人たちの素朴な思いが反映されている。

金剛山の地名の由来

金剛山という名は文字通り、宝石中の最高とされる金剛石になぞらえて名付けられたものである。

金剛山は季節の違いによって風景を異にし、古くから夏は蓬莱山、秋は楓岳山、冬は皆骨山とも呼び習わされている。蓬莱山は、金剛山の夏の姿が森林の生い

茂る、さわやかな緑陰をなす山だとして、楓岳山は秋に全山が美しく紅葉するとして、皆骨山は冬中白雪に覆われ銀世界をなして山の地勢が露わになるとして、それぞれ付けられた名である。

金剛山

妙 香 山

平安北道香山郡に広がる妙香山は、彫刻さながらの秀麗の美と雄壮な山容が見事に溶け合って絶景をなす名勝で、古くから朝鮮の名山の一つに数えられている。

妙香山はその景勝に加え、普賢寺その他遺跡や遺物が多く、さらに侵略軍に抗して勇敢に戦った人民の闘争の物語や数々の伝説なども多くこもる由緒ある山として広く知られている。

妙香山

今日妙香山は世界的な観光地、人民のリゾート地としてより立派に開発されて内外の好評を得ている。

1979年10月15日、妙香山にある国際親善展覧館のバルコニーに立った金日成主席は、全山が美しく紅葉した秋の景色を望見して、『妙香山の秋の日に』という即興詩を詠んだ。

国際親善展覧館

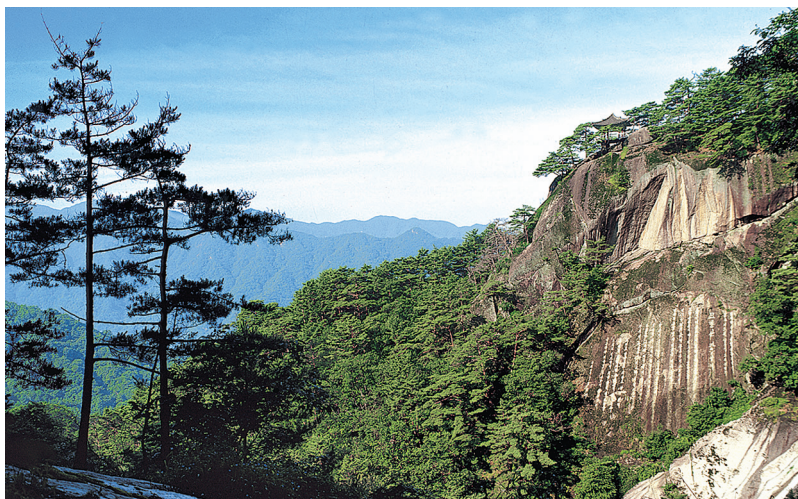
妙香山の地名の由来

妙香山とはその名の通り、山容が奇妙で香気の漂う秀麗な山だとして付けられた名である。妙香山が奇妙にして雄壮な姿を持つに至ったのは、この一帯の地質と地形の変動の歴史と関連しており、それに妙香山が香気を放つ麗しい山だとされるようになったのは、この一帯にモンラン（オオヤマレンゲ）、ヒロハハシドイ、ミヤマビャクシン、ニオイネズコなど香りの高い樹木が多く生えているからである。

妙香山の開拓史は長いが、11世紀初めから現在の名で呼ばれるようになった。それ以前は延州邑に属する山だとして「延州山」と呼ばれ、高麗中葉以降は山の岩がいずれも特別に白く汚れがないとして「太白山」とも呼ばれた。

妙香山の最高峰は毘盧峰と称されているが、「毘盧」なる語は仏教の経典で「最高」という意味で使われており、朝鮮における古くからの仏教信仰の中心地の一つであった妙香山の歴史に一定の彩りを添えていると言える。

妙香山の数々の文化財や峰々、岩や滝などは、古代国家の建国説話、反侵略闘争にまつわる伝説、妙香山の麗しい風致とそれを神秘視した語り物、宗教関連の伝説などさまざまの内容と結びつけて語り継がれてきた。

紅葉した上元洞

妙香山の引虎台

引虎台伝説

妙香山の竜淵の滝の上に引虎台と呼ばれる大岩があり、上元庵という名のいおりと向かいあっている。引虎台と上元庵には次のような伝説がこもっている。

昔ある年の５月、季節外れのみぞれが降りしきり、上元庵に向かっていた人たちが道に迷い、滝の流れ落ちる高い崖に登るすべもなく困り切っていた時、不意に一匹の大きな虎が現れて道案内をし、彼らを上元庵のある崖の上まで導いたという。

引虎台にはこれとはやや違った今一つの話も語られている。

妙香山に住むある僧が、竜淵の滝の崖の上に寺を建てるに適した場所が一つあるという話を聞いて、そこに寺の敷地を定めるべく出かけたが、途中大雪に降られて道に迷いまごまごしていると、大きな虎が現れて雪を掻き分けながら彼を崖の上へ導いた。こうして無事竜淵の滝の崖の上に敷地が定まり、上元庵が建てられるに至った。

九　月　山

黄海南道の北西部地域に位置する九月山は朝鮮の名山の一つである。

雄壮な断崖、峨々たる峰と奇岩、美しい滝や淵などを持つ幾つもの渓谷からなる九月山には、古来先人たちが残した創造に富む数々の遺跡遺物があり、住民数が相対的に少なかった金剛山や妙香山に較べてかなり多くの伝説が残されている。

九月山の地名の由来

九月山という名は昔、弓忽山、クォル山などと呼ば

九月山の秋

れていたのがなまって出来たものである。
古文献の記録によると、弓忽山を速く発音するとクォル山になり、ゆっくり発音すると九月山になると説明されている。
また神話によると、九月山は昔、阿斯達山、クムミダル山、白岳山などとも呼ばれていた。アサとは朝、初めなどの意味を持つ古語であり、ダルは土地、山などを言う古語である。九月山には現在も阿斯峰という名の峰がある。クムミダルはコミダルという名に由来しているが、コミダルは、コム(熊)ウィ(の)ダル(山)を早く発音して出来た名である。
白岳山は山頂の岩が白色を帯びていることに由来している。

貝葉寺の由来

貝葉寺は九月山４大寺院の一つとして名高かった。９世紀初め、九葉大師という僧が建てたとされるこの寺は初め閑山寺と呼ばれていたが、大師がインドに渡り貝(インド地方に産する常緑高木。広い葉を持つので、それに仏経を写す習わしがあった)の葉に仏経を書き写して持ち帰ってから貝葉経を蔵する寺だとして貝葉寺と呼ぶようになったという。

九月山の冬と春

九月山の淵

達泉温泉の由来

九月山月明谷下手の山麓に達泉という名の温泉がある。

九月山の麓に住んでいたタルという孝行娘が、母親の病気の治療に使う薬草を取りに山へ入った時、大蛇に食い付かれて足の折れたヒバリを助けた。

ところでヒバリは月明谷の下手にある、湯気の立つ泉に体を浸して出てきたが、なんと足がきれいに治り、勢いよく飛び去るのである。タルはあまりもの不思議さに驚き、自分も泉水を器に汲んで持ち帰り、母親に飲ませたところ、母の病気はたちどころに全快した。

それ以来、村人たちはこの温泉を達泉と名付けて利用したという。

無塩峰伝説

　昔、九月山麓の海辺の村に倭寇の襲来がひんぴんと続いた。たまりかねた村人たちは寄り合って防御対策を相談したが、その場には知恵深くてクェドリ（知恵っ子）と愛称されている少年がいた。じっと考え込んでいた少年は、山の峰の木々の枝にこもを被せて、野積みの穀物や塩がたくさんあるかのように見せかけようという案を出した。村人たちはみなそれに賛成して力を合わせ、山の木々の枝にこもを被せて毎日峰に登り、太鼓を鳴らし刀や槍を振るう音を出して気勢を上げた。

　倭寇が送り込んだ間者が柴刈りをしている風を装った少年を見て、「おい、あの山に白っぽくちらちらして見えるのは一体何だ」と聞いた。少年は「おやっ、それも知らないなんて。今、九月山にはわが国の軍隊数千名が陣を張ってるんだ。あの白っぽく見えるのはみな軍隊の糧秣や塩だそうだよ」と答えた。

　驚いた間者はあわてて引き返した。報告を受けた倭寇の大将は恐れをなして、その後当地方への襲撃は一切断念した。

　それ以来、こもで木々の枝を擬装したその嶺を塩が有りもしないのに有るかのように見せかけたとして無塩峰と呼ぶようになった。

七 宝 山

咸鏡北道東海辺の南側に位置する七宝山は、東方に朝鮮東海を控え、北方の漁郎川と南方の花台川の間の250余平方キロメートルの広大な地域を占めて荘厳にそびえる名山である。

18世紀の著名な旅行家、詩人であった朴琮は七宝山の秀麗な景勝を評して、澄明で枠組みの鮮明な点では金剛山が最高であり、高くも奇抜という点では雪岳山が優れ、錯綜と入り組む重畳たる山容は妙香山を第一とすべきだが、奥深くも奇異な味わいに満ちている点では七宝山は抜群だと言えようとたたえている。

七宝山の地名の由来

七宝山の名の由来は幾通りかあるが、その代表的なものは、山にこの世で一番貴重で美しいとされる7種の宝物が埋もれているとしてそう呼ばれるようになった。

七宝山は山と渓谷、海辺の風景がそれぞれ異なるとして、内七宝、外七宝、海七宝の区別が付けられている。

七宝山はまた渓谷と樹林、海辺の景勝が金剛山と通じるとして、咸北金剛とも称された。

外七宝の降仙門

外七宝の露積峰

外七宝の能仁の滝

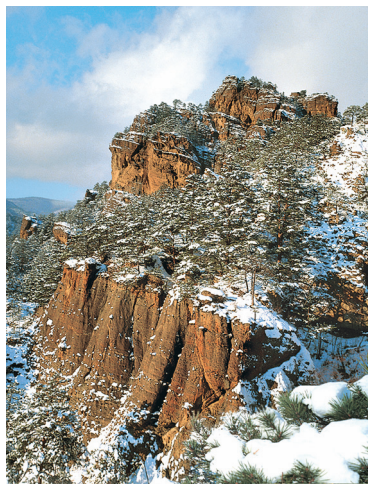
内七宝の白岩

内七宝の夫婦岩

内七宝の万獅峰

海七宝の松（ソル）島

海七宝の万物相

海七宝のムンピル岩

海七宝の月(タル)門

内七宝の虎口岩

崔錫金伝説

七宝山の赤石岩を通り抜けると、すぐその場に頭陀袋を背負った僧と、その後を赤子をおぶった女が続き、さらにその後を一匹の子犬がちょこちょこ追っている格好の岩が目を引く。当地の人たちはこれらを指して崔錫金岩と呼び習わしているが、そこには次のような伝説がある。

昔むかし、七宝山の東には豊饒な田野が広がり、人々は豊かに暮らしてはいたが、彼らの多くは吝嗇であった。

ある日、一人の僧が布施を乞うて家々を回り終日無駄足を踏んだ末、ようやくある親切な女に出会って一升程の米を施された。感動した僧は、女を厄難から救おうと思い立ち、彼女を誘って村を後にした。出立に際して僧は「途中どんなことがあっても決して後ろを振り向いてはならない」と強く念を押した。二人が赤石岩の上に到着した時、背後で雷鳴が激しく轟いた。驚いた女は僧の注意を忘れて思わず振り向いた。すると、それまであった村も田野もたちまちにして海の中に浸し、同時に僧と女も、そして後を追っていた子犬も岩に変わってしまった。

別説によると、崔錫金という長者が布施を乞う僧の容器に馬屋の馬糞を入れろと下僕に命じた。ところが、長者の嫁がひそかに米を僧に与え、彼に伴われて家を出たところ、先の話と同様な出来事が生じて共に岩に変わってしまったという。

2. 大河とその名の由来

鴨 緑 江

鴨緑江は白頭山の天池に源を発して朝鮮西海に注ぐ朝鮮半島最長の川である。古くから二千里（１里は400メートル）の長江と呼ばれてきた鴨緑江の全長は803キロメートルで、朝鮮民族と深く関わり合いながら流れ続けてきた。

鴨緑江は、勇敢な英知に富む朝鮮の先祖たちが侵略軍を撃退する戦いで大功を立てる数々の物語を伝えている。今も鴨緑江のほとりには祖国を守って戦った先人たちの遺跡や城址が随所に見られる。

17世紀、北方から攻め込んだ侵略軍を殲滅し、血まみれの刀剣を鴨緑江の水で洗ったといわれを語る満浦市の洗剣亭や義州の統軍亭その他多くの楼亭、それに義州の高麗長城、枇峴の白馬山城、昌城の金山城、楚山の徳地城、中江の閭莚城などの諸山城も昔日の面影をとどめている。

鴨緑江の流域は山林資源の宝庫とされるほどで、美しい風景に恵まれており、その他の貴重な資源も豊か

である。特に鴨緑江とその支流には80余種の魚類が棲息し、水力資源も豊富である。

鴨緑江の流域にはまた、金日成主席が抗日武装闘争を展開した当時の革命史跡や革命戦跡が諸所にある。

鴨緑江の名の由来

高句麗時代、鴨緑江は「アリナリ」と呼ばれていた。「アリ」は長い、大きいを意味し、「ナリ」は川、渡しの意味を持ち、したがって「アリナリ」は長江の古語である。のちに川の名を漢字で表して「鴨緑江」と変えたのであるが、これは水が澄み、鴨の頭のように清く青々としているという意味である。高句麗の建国説話に青河という川の名が見られるが、これは鴨緑江の別名で、やはり青く澄んだ川という意味で鴨緑江と通じた名である。

豆 満 江

豆満江も白頭山の天池に源を発して朝鮮東海に注ぐ、朝鮮半島第二の長江で、全長は547.8キロメートルである。

日本帝国主義の占領下にあった頃の豆満江は、国亡き朝鮮人民の多くが故郷を捨てて異郷万里の道へとあ

てどもなく渡り行く涙の川であった。けれども、金日成主席が抗日大戦の銃砲声を高々と轟かせて以来豆満江は、革命先達の血潮にまみれた戦いの痕跡が色濃く宿る川となり、今では楽園の川に様変わりしている。

豆満江流域の山林の94パーセントは成熟林である。

川の下流には水路の変化と堆積作用によって生じた大小数十もの中州が群がり、河口一帯は三角州を形成している。豆満江にはこの川にだけ見られる豆満江キタノウグイをはじめ数十種の冷水性魚類や溯河魚が棲息している。豆満江とその支流は、電力の生産、灌漑用水、工業用水、河川輸送など多くの部門において広く利用されている。

豆満江の名の由来

豆満江という名は古語「チュムン」という名に起因している。「チュムン」は千という意味であるが、これは川の本流と支流を合わせると千にものぼるとして、川の名を「チュムン」と呼んだのである。豆満江の長さ5キロメートル以上の支流はおよそ300を数え、それより短い支流まですべて合わせると実際千内外になる。「チュムン」の音を漢字で書き改めた表記が「豆満」である。

大 同 江

平安南道大興郡の狼林山に始まり朝鮮西海に注ぐ大同江は、首都平壌の中心部を貫いて流れる由緒ある大河である。

朝鮮半島第五の長江大同江の長さは450.3キロメートルで、流域には数多くの地下資源が埋蔵されており、山林が繁茂し、針葉樹や広葉樹が広く分布している。川には60種を越える魚類が棲息し、水は工業用水、農業用水、流域内の都市用水として活用されている。

大同江のほとりには金日成主席の郷里である朝鮮人民の心のふるさと万景台があり、市中心部の岸辺にはチュチェ思想塔が巍然とそびえ立っている。

大同江上には運搬堆積作用による綾羅島、羊角島、スク島その他幾つもの中州がある。

スク島には、1948年５月、金日成主席が南北朝鮮政党・社会団体代表者連席会議に参加した南朝鮮の名望ある政客たちを招き、民族団結の一路へと真情をもって導いた統一戦線の事績がこもっており、また新世紀の要請に見合う雄壮な建築物――科学技術殿堂が位置

している。
　綾羅島には、第13回世界青年学生祭典の開閉幕式が盛大に催されたメーデースタジアムがある。
　1960年７月、若き日の金正日総書記が学友たちと共に大同江のみぎわで日の出を望み、『大同江の日の出』と題する詩を詠んだ。
　朝鮮西海に接する河口の外海には、8キロメートルの長さを持つ、世界的に名の知られた西海閘門が伸びている。

チュチェ思想塔

メーデースタジアム

西海閘門

大同江のスク島に建てられた科学技術殿堂

大同江畔の新しい通り―未来科学者通り

大同江の名の由来

昔、大同江は浿江、浿水、王城江などと呼ばれたが、これらの名はいずれも歴史の古い栄えた都市平壌を流れる川という意味である。

朝鮮における首都の古語は「ペラル」で、浿江、浿水はペラルの川、つまり首都の川という意味である。ここで「浿」は平壌の旧名「パラナ」または「プルナ」の「パラ」「プル」の吏読式表記である。王城江も同様に王城の地、首都を流れる川という意味である。

大同江という名は11世紀頃からの呼称であるが、一部の識者は大同江という表記から判断し

て、多くの流れが寄り集まって出来た川という意味に解釈した。

例えば、古い地理書である『東国輿地勝覧』『大東水経』などに、「多くの川が集まり流れているので大同江と名付けられた」と記されている。

ところで「大同」という吏読式表記を朝鮮の古語から考察してみると、「ハンドゥル」という意味である。つまり「ハン」は「大きい」、「ドゥル」は「プル」と同様、都、首都、広原などを指す語である。

こうしてみると、「大同江」という名も古い歴史を持つ平壌の川だと解釈するのが正しいと言える。

3. 旧８景及びその他の名勝の由来

旧８景のいろいろ

朝鮮人民は古い昔から秀麗な山河に恵まれて暮らしていることを誇りとし、自地方の優れた景勝や文物、風俗世態を８景という語でまとめて呼称し、競ってお国自慢をしたものである。

このように朝鮮で８景という表現が多く使われたのは、古来朝鮮人は８という数を縁起の良い吉数とみなしたことに起因している。

朝鮮民族が８を吉数として重んじ始めた歴史は古い。古朝鮮の始祖壇君が国を建てた際宰相を８人としたことや、古代朝鮮の一つ辰国の領域で出土した８手形青銅鈴はそのことを立証する実例である。有名な金剛山８天女の伝説に現れる天女の数が８人であることもそうした慣習に基づいていると言えよう。

朝鮮の旧８景の中には平壌８景、関東８景、関西８景、妙香山８景など今日も世に広く知られているものもあるが、長い歳月の流れとともに人々の記憶から消えたものも多い。

古文書の記録によると、国内のほとんどの地方に８景があったが、その数は実に数十に達していた。

記録によって現在に伝わる地方別の８景にはおよそ次のようなものがある。

—平安道地方

平壌８景、関西８景、妙香山８景、
義州８景、江東８景、三登８景

—黄海道地方

海州８景、豊川８景

—咸鏡道地方

会寧８景

—江原道地方

関東８景、江陵８景、三陟８景、
平海８景

—開城地方

松都前８景、松都後８景

—京畿道地方

漢陽８景、南山８景、金沙８景、通津８景

—忠清道地方

韓山８景、清安８景、温陽８景、
庇仁８景

—慶尚道地方

聞慶８景、蔚山８景

朝鮮８景

朝鮮８景は古くから伝わる全国的な８景で、白頭山、牡丹峰、金剛山、妙香山、赴戦高原、智異山、海運台、仏国寺を指す語である。

牡丹峰

牡丹峰は平壌市を貫流する大同江西岸一帯にある山である。

大同江の岸沿いに伸びている錦繡山に、最勝台を中心にして幾つもの丸々として連なっている峰々の模様が、今まさに開かんとする牡丹の蕾を思わせるとしてその一帯を牡丹峰と呼んでいる。

最高の峰最勝台の高さは95メートルで、牡丹峰はこの最勝台を中心に北と南及び西方に伸びる緩い稜線に沿って丸やかに盛り上がった幾つもの峰々からなっている。ここには慶上谷、興富谷その他浅い谷が幾つかある。北側には竜南山（47メートル）、南側には万寿台など低い丘陵があり、東側傾斜面には切り立つ絶壁清流壁が大同江の清い流れに沿って長く伸びている。牡丹峰と向き合ってその風致が引き立っている大同江上の中州綾羅島にはメーデースタジアムがある。古来乙密台の春と浮碧楼の月見は、平壌８景の一つに数え

られている。
　牡丹峰の植物は180余種にのぼり、そのうち針葉樹は20余種、広葉樹は70余種である。
　各所に大小の人工滝があり、牡丹峰の名所清流壁からは清流滝が流れ落ちている。また、牡丹峰の谷間には青々とした茂みの中に山の風致を一段と引き立てる蓮池が処々にある。
　乙密台や最勝台など楼台と調和させて、峰の上や山腹にはとりどりのあずまやが立てられている。

牡丹峰の玄武門

牡丹峰の秋

赴戦高原

朝鮮８景の一つである赴戦高原は、咸鏡南道赴戦郡にある。

高原の面積は1770平方キロメートル、海抜は平均1490メートルである。

周りに海抜2000メートル内外の高い山々がそびえ立つ高原の中程に赴戦湖があり、北方に向けて赴戦江が流れている。この一帯には金、モリブデン、蛇紋石などの地下資源が埋蔵されている。高原は赴戦湖と赴戦江の谷間に向けて傾斜しており、全般的に北側へ行くほどに傾斜は緩慢になる。平均傾斜度は4～5度であり、地面はほとんど平坦である。

赴戦高原の気候は大陸性で、その特徴が顕著である。年平均気温はセ氏0.4度、１月の平均気温は零下18.2度、７月の平均気温は16.6度であり、冬は長くてきわめて寒く、夏は短く涼しい。年平均降水量は800ミリ内外である。

赴戦高原は山林資源が豊富で、チョウセンカラマツ、トウシラベ、エゾマツなどが生い茂っており、ヒオウギアヤメをはじめ高山地帯にのみ見られる珍しい花や湿地植物もいろいろとある。

高原にはトラ、クマ、ノロ、ジャコウノロ、カワウソその他諸種の動物が棲息している。

赴戦高原は高原地帯特有の自然風景、麗しい渓谷美、「山中の海」と言われる大人工湖赴戦湖の風景、東方のはるかかなたに見える朝鮮東海の日の出など、他の地では見られないさまざまの絶景が広がる名称の地として知られ、勤労者の楽しいリゾート地、キャンプ地、探勝の地になっている。

とりわけ夏季は素晴らしい行楽地としての人気が高い。

智異山

慶尚南道咸陽郡と山清郡の境界にある山で、海抜は1915メートル、主な峰は天王峰(1915メートル)、般若峰(1728メートル)、老姑壇(1507メートル)、セソク峰(1642メートル)などである。

山の頂は平坦であるが、尾根の斜面は浸蝕作用でひどく削られ著しく傾斜して渓谷をつくり、海抜1600メートルを超える地帯は岩の露出した石の山をなしている。

智異山は雄壮で特に風光に優れていることで朝鮮８景の一つに数えられている。

山には華厳寺をはじめ古跡が多々ある。

544年に建てられた華厳寺は、７世紀後半に拡張され、９世紀後半に更に拡張されて大寺院となった。寺院は16世紀末の壬辰祖国戦争(文禄・慶長の役)の際に焼失したが、17世紀に数年をかけて再建され、その後

もたびたび改修されて今日に至っている。現在華厳寺には4獅子3重の塔、5重の塔、石灯その他後期新羅時代の優れた石造物が多く残っている。

寺院内には覚皇殿をはじめ少なからぬ殿堂がある。覚皇殿は華厳寺の本堂で、朝鮮の寺院中最も規模の大きい建物の一つである。

建物の丹青は全般的に青緑色を主調とする錦丹青である。寺院には「智異山華厳寺」と書かれた扁額が掛かっている。

仏国寺

慶尚北道慶州市にある仏国寺は、6世紀前半期に造営され、8世紀中葉に大きく改築されたが、壬辰祖国戦争の際に焼失し、18世紀に至って再建された。仏国寺は大雄殿を中心とする東側区域と極楽殿を中心とする西側区域に大きく分かたれている。東側区域の入り口には白雲橋と青雲橋という名の石段があり、石段を上がった所に紫霞門が立っている。紫霞門の左右に伸びる歩廊と一番奥の無説殿の左右に伸びる歩廊は、大雄殿を四角形に取り囲んでいる。紫霞門をくぐるとそこは大雄殿の前庭で、多宝塔と釈迦塔が東西に並んで立ち、その中間に石灯がある。

仏国寺内の石造物はすべて硬い花崗岩を精巧に加工

して造られており、美しく優雅な彫刻や構造物をさまざまに造り上げていた朝鮮の先人たちの才能をうかがうことができる。

大雄殿は花崗岩製の均整のとれた基壇の上に建てられた正面5間、側面5間の入母屋造りで、建物の内外は繊細な彫刻と華麗な錦丹青で装飾されている。紫霞門は正面3間、側面2間の入母屋造りである。

仏国寺の建物は当時代朝鮮人民の高い建築術を語る民族文化遺産の一つである。

『朝鮮8景歌』

朝鮮8景が広くその名を高めることになったのは国の解放前、作曲家ヒョン・ソッキが『朝鮮8景歌』を発表し、それが大いに流行したことと関係している。

当時、朝鮮の愛国的な作曲家は日本帝国主義の過酷な弾圧にも屈せず、同胞たちの民族精神を高揚すべく、郷土愛の濃厚な作品の創作に努めた。その一つが『朝鮮8景歌』である。

この有名な『朝鮮8景歌』が世に生み出された日の夜の出来事を、作曲家李冕相は次のように述懐している。

日本帝国主義の歌謡弾圧が激化していた1935年の頃だったと思う。

ヒョン・ソッキが『朝鮮8景歌』の草稿を持ってきて、

私に助言を求めた。
　われわれ二人は当時たいそう親しい仲で、作品を構想すれば互いに相手の意見を聞き、原案を手直ししたりした。
　ヒョン・ソッキがやってきたのは日暮れの時で、旋律を聞いてみるとどうもかんばしくない。
　二人は遅くまで膝を合わせてこうも構想し、ああも構想して幾つものメロディーを作ってみたが、どうしてもうまくいかなかった。
　それでもあきらめず、粘り強く苦心に苦心を重ねた甲斐があって、ついに歌詞に適した民族情緒のこまやかなメロディーを見出した。こうして祖国の麗しい三千里錦繍江山を歌った『朝鮮8景歌』は作られたのだが、そのあと家庭内にちょっとした騒ぎが起きた。
　その日は私の母の命日であったが、ヒョン・ソッキと二人して作曲に熱中していたあまり、つい法事のことを忘れていたのである。
　夜が更けて妻が部屋へ備えの膳を運んできたが、私たちが作曲に夢中になっているのを見て膳をそっと置いて台所に戻った。歌が完成してふと見ると、膳の傍らに一升瓶の酒まで添えてある。私は、一晩中作曲に苦心している労をねぎらって、妻が友と一緒に飲むように整えた酒肴だろうと早合点して膳に向かい合った。われわれは歌が出来上がったことで上機嫌になり、酒ならぬ喜びを飲むかのような気分にひたった。
　たとえ仲間の作品だとはいえ、おのれの作品を完成したことのように嬉しかった。ところが瓶をすっかり空けた

時、妻が入ってきて、「あら、法事はもう済ませましたの」と私に小声で聞くのである。
「えっ、法事?!」
私はその日が母の命日であることを思い出した。
「なんだ、それをなぜ今になって話すのだ」
「まあ、朝話したじゃありませんか。それなのにもう忘れちゃったんですか」
「いやあ、そうとも知らず……　とんだことをしでかしてしまった」
「膳に御飯が一椀しかないのを見たら気が付くはずでしょうに。でなかったら、あなたは私がお客様をないがしろにする冷たい女だと考えたんじゃありませんか」
妻の困りきった様子を見て、ヒョン・ソッキはまごまごした。
「なあお前、ぼくたちはね、今夜名曲を作り上げたんだよ。それこそ朝鮮の名曲なんだ。お母さんがこのことを知ったらどんなに喜ぶだろうか」
「まあ、だったらきっとお喜びになることでしょう」
妻の気分がほぐれたのを見て、私は膳に『朝鮮8景歌』の楽譜を載せ、「お母さん、喜んで下さい。今夜ぼくたちは名曲を創作しました」と言ってヒョン・ソッキと並んで拝礼した。
あの時から長い歳月が流れたが、私には今もヒョン・ソッキの『朝鮮８景歌』を完成したその夜のことが忘れられない。……

朝鮮８勝

朝鮮８勝は朝鮮８景に次ぐ絶勝で、これには鏡城、夢金浦、閑麗水道、扶安の辺山半島、扶餘、伽倻山の海印寺渓谷、俗離山、漢拏山が属する。

鏡城は咸鏡北道鏡城郡の機関所在地であり、うっそうとした樹木が生い茂る連峰や奇岩、年中休まず流れる谷川の澄んだ水、滝と青々とした淵、処々に湧き出る温泉などで風致に優れ、海蝕海岸も絶景である。

夢金浦は黄海南道龍淵郡海辺の名勝で、この地名は黄金の山に寝て夢を見たという伝説に由来している。夢金浦は古来真白の砂浜に赤いハマナス、青い松が一つに溶け合った海浜の風景、夕暮れの海景色、海岸の奇岩絶壁などが美しく、代表的な名勝の一つとして知られている。

閑麗水道は慶尚南道統営郡の閑山島と全羅南道麗水市の間にある海峡で、大小の島嶼と半島、湾岸の風致、冬は暖かく夏は涼しく、亜熱帯常緑広葉樹が育つ周辺地域の風光とともに、壬辰祖国戦争（1592～1598年）の際日本侵略軍を撃破した戦跡があることで有名である。

扶安の辺山半島は全羅北道扶安郡の半島で、美しい

山地、白い砂浜、海岸の絶壁が見事な調和をなし、昔から「湖南金剛」と呼ばれてきた。

扶餘は忠清南道の西南部に位置する百済時代の古都で、扶蘇山、落花岩、皐蘭寺など名勝古跡が多いことで広く知られている。

伽倻山の海印寺渓谷は、慶尚南道陜川郡の伽倻山麓の海印寺に入る深い渓谷で、地勢の秀麗な名勝である。

関東８景

関東８景は、関東地方すなわち今日の北・南江原道と慶尚北道の北部に分布している諸名勝地で嶺東８景ともいう。昔から通川の叢石亭、高城の三日浦、杆城の清澗亭、江稜の鏡浦台、三陟の竹西楼、襄陽の洛山寺、蔚珍の望洋亭、平海の越松亭を関東８景と呼んでいる。

関東８景の風光は大きく海辺の景勝、湖水の景勝、河川の景勝、山岳の景勝に分けられるが、そのいずれもが独特の美を誇って絶景をなしている。

通川の叢石亭

三日浦

関西８景

関西８景は、関西地方すなわち平壌市と平安南道、平安北道、慈江道に位置する諸名勝である。それらの名勝はそれぞれの特色を誇っているが、概して河のうねり流れる河岸の絶壁の秀麗な美が強調されている。

日本帝国主義の朝鮮占領と去る祖国解放戦争（朝鮮戦争）の爆撃で、関西８景の古い建物は破壊され、名勝もそれらの面影を失っていたが、戦後にそれらすべては昔日の姿を取り戻し、勤労者の立派なリゾート地として活用されている。

練光亭

慟哭して筆を折った詩人

関西8景の第一に数えられている平壌の練光亭の柱には、高麗時代の有名な詩人金黄元が浮碧楼に立って大同江の壮大な景観を詩にこめようとして詠み始めたが、その絶勝に圧倒されてどうしても転結をなしえず、未完成のまま残された最初の２句が掲げられている。

もともと、この詩は浮碧楼に掲げられていたが、今は、関西８景の一つとして有名な、訪ねる人の多い練光亭に移されたのである。

西京（現在の平壌）留守（長官）を務めていた金黄元はある日、牡丹峰の浮碧楼に遊んで大同江とその一帯を眺望し、そのあまりもの素晴らしさに魅了され、抑えようのない感動を一首の詩にこめようと思い立った。

非凡の詩人として後日隣国で「海東第一」という評価を得たほどの彼が、この絶景を前にしては我慢できるはずがなかったであろう。

彼は梁にずらりと掲げられている古今の詩人の作を読んでみたが、どれ一つとして気に入るものはなかった。

そこで金黄元は、配下の役人にあれらの額をみな下ろして焼却してしまえと命じた。自分こそが大同江の景観を

たたえる最上の傑作を作って世に残すべきだと自負したのである。

こうして巻紙を広げた金黄元は、一挙に筆を動かした。

長城一面溶溶水
大野東頭点点山
（長城の下　大河は悠々と流れ
大野の東　丘陵は点々と立つ）

ところが、勢い良く動いていた筆がここでひたと止まった。

周りに立って筆の動きに見入っていた役人たちは、意外な思いで顔を見合わせたが、詩人の筆はただすずりを突くばかりである。

時間は流れ、いつしか陽は西に傾き始めたが、金黄元は書き起こした２句を僧の念仏よろしく繰り返してもぐもぐ苦しそうに口ずさむばかりであった。

考えても考えても後の句が浮かばず、彼はとうとう筆を投げ出してしまった。

「ああ、この天下の絶勝を歌うにはわしの才能があまりにも足りない」

金黄元は無念やるかたなく、男泣きに泣いた。

平壌８景

平壌８景にはそれぞれの特有の形勝と並んで、平壌の人たちの美風良俗と多情多感な情緒がよく反映されている。

平壌８景は乙密台の春、浮碧楼の月見、永明寺の僧訪問、普通門の送別、車門渡しの舟遊び、蓮塘の雨の音、龍山の青い精気、馬灘の雪解け水である。

乙密台の春は、春牡丹峰の乙密台から望む麗しい風景であり、浮碧楼の月見は牡丹峰の浮壁楼に立って眺める名月に心を惹かれる面白味である。

牡丹峰の乙密台

永明寺の僧訪問は、牡丹峰の清流壁にあった永明寺の僧侶を訪ねていく道筋の風景の美しさに興趣をそそられるということであるが、永明寺は去る祖国解放戦争の際に爆撃で焼失した。

普通門の送別は、平壌城の西北側城門の普通門まで出かけて客を見送る風景を指し、客を遠くまで見送ることを当然とする朝鮮民族の美風を語っている。

車門渡しの舟遊びは、大同江と順和江、普通江が落ち合う所である南湖の岸辺に舟を浮かべ、舟べりを打つ水の音や青い空を自由に飛び交うカモメの姿に惹かれる楽しみを、蓮塘の雨の音は、練光亭前の蓮池に降る雨の蓮の葉を叩く音が、あたかも鴛鴦の曲を奏でる琵琶の音のようだとし、その面白味を言い表したものである。

龍山の青い精気は大城山の景勝をたたえたもので、四季青い松に覆われ、春早くから晩秋遅くまで変わりなく青々としていることの形容である。この四季青々とした松林に彩りを添えるかのように季節の移り変わりとともにさまざまの花が咲き乱れる大城山の自然風景はいっそう美しい。

馬灘の雪解け水は、大同江の早瀬である馬灘に、早春雪解けの水が溢れんばかりに流れ込んで渦巻く風景である。ちなみに馬灘という名称は、昔、外国

侵略軍の馬の死骸が次々に流れ込んで積み重なりながら「馬の早瀬」をなしたという意味で生まれたものである。

会寧８景

会寧８景は、19世紀末に編纂された『続関北誌』に紹介されている。

ここには会寧川のしだれ柳、雲頭城の暮秋の紅葉、豆満江の魚灯、碧坪に流れる渋い歌声、東側楼台の月見、城の西の青霧、鳳儀山の霧雨、鰲山の雪景色が記録されている。雲頭城は会寧市城東里の雲頭峰の古城を指し、碧坪は会寧市碧城里と徳興里を流れる碧城川下流の平野を指しており、鰲山は会寧市にある鰲山徳のことである。

その他の古書にはこれらとは異なる「会寧８景」についての記録もある。

そこには鰲山の夕焼け、雲頭城のたそがれ、矢場のウグイスの声、霧の川辺の魚見物、活況を呈する国境市場、稲穂のそよぐ田野、月夜の川の洗濯風景、夕暮れの水汲みからなっている。これらには、昔日の会寧地方の人たちの勤勉にして美しい世態風俗が厚く反映されている。

妙香山８景

妙香山８景は朝鮮の名山妙香山の中の最上の景観が選ばれているが、これには尋真亭での客の出迎えと送別、仏影台の月見、引虎台の滝の見物、金剛池の魚見物、耽密峰の濃い樹林、雪嶺台にたなびく雲または白雲台の紅葉狩り、壇君台の夕焼け、鳳頭陀の万瀑見物が属する。

金剛山の８大美

金剛山の８大美は朝鮮民族の古くからの誇りである。

その第一はまず山岳美である。

金剛山には１万2000峰と言われる無数の峰が競い立ち、最高の峰毘盧峰をはじめ高さ1500メートルを超える峰は10余、1000メートル以上の峰は100余を数える。実に千峰の山岳と称するにふさわしい山である。

集仙峰、日出峰と月出峰、彩霞峰、燭台峰など峰の頂が尖り、槍の穂、剣先、錐、燭台、筆を立てたような強さを誇る峰々もあれば、遮日峰や白馬峰のように緩慢な曲線をなして雄壮ながらも柔らか味を感じさせる峰などもある。

天女が降りてきて遊び、金剛山の絶景に魅せられて天上に帰ることを忘れ、そのまま岩になってしまった

という天女峰など、金剛山の峰々の奇勝は眺めるほどに壮快である。
　金剛山には名だたる彫刻家、建築家も舌を巻くような「彫刻品」が至る所にあって、人々がいつまでも見とれて動かないという風景も見られる。
　三仙岩や鬼面岩をはじめ多宝塔と須弥塔、七層岩など天然の石塔や、深い山奥で夜も蝋燭を灯して勉強している子供の姿をした童子岩、可愛い赤児をおぶっている女の姿をした愛の岩、仲むつまじい夫婦の姿を思わせる夫婦岩、師と弟子が質疑応答をしているかのような問答石などを見て、人々は自然の精巧な彫刻術にただただ感嘆するほかないのである。
　渓谷美も山岳美に勝るとも劣らぬ素晴らしさである。
　金剛山の渓谷美を代表する万瀑洞の谷と毘盧峰に連なる深くも長い九城洞渓谷は、うっそうたる茂みと奇岩怪石が見事に調和しながら、たぐい稀な景勝を次々と無双の変化をもって展開し、世にも珍しい渓谷美を呈している。
　他方、水流花開洞渓谷では澄明な水が岩の上を淀みなく流れ、夏には百花が咲き乱れ、さまざまの鳥がさえずり、さながら童話の世界を彷彿させている。
　金剛山はまた高所から見晴らす眺望の美が格別である。

安心台と天仙台から眺める万物相の景観、飛龍台や九龍台から見おろす上八潭の美しさ、隠仙台や仏頂台に立って見る金剛山最大の十二の滝の光景は天下の絶佳と言えよう。

内金剛、外金剛、海金剛を一望にして見おろせる毘盧峰や中央連峰に立って望見する金剛山はまさに崇厳にして壮快である。

空と海、雲と島のすべてが紅に染まり、巨大な火の玉のような真っ赤な太陽が徐々に差し昇る日の出も、金剛山８大美の一つである。

仏頂台や毘盧峰、海万物相、叢石亭で望む日の出の崇厳・壮快さとは対照的に、外金剛の大慈峰や水晶峰に立って眺める日の出はまさに絶佳の一語に尽きよう。

探勝を終えて浸かればたちまち疲労が回復する金剛山温泉、一度飲むだけでも不老長寿すると言われている白雲台の下の金剛薬水をはじめ処々のミネラルウォーター、各所に湧出する新鮮な泉は、金剛山の今一つの誇りである。

湖と淵の美もまた金剛山の絶景と無縁ではない。

三日浦をはじめとする澄み切った静穏な湖や九龍淵、鳳凰潭、連珠潭、上八潭、玉流潭などあまたの美しい淵も金剛山８大美の一つである。

金剛山の美は滝の壮観によっていっそう輝いている。

金剛山の４大名瀑布——九龍の滝、飛鳳の滝、玉永の滝、十二の滝その他の滝が玉のように真白の絹布さながらに流れ落ちる様は、金剛山の美を一段と際立たせている。

このように山岳美、彫刻美、渓谷美、眺望美、日の出の壮観、温泉とミネラルウォーター、それに泉と湖、淵の美、滝の美は、天下の絶勝金剛山を象徴する8大美である。

その他の名勝の由来

古文書には、諸８景とともに平壌の和村（万景台）10景、咸鏡道の白頭３景、江界の石州16景、黄海道の鳳山12景、京畿道の漢陽10景、慶尚道の驪州12景と寧海12景、大邱10景、密陽10景、巨済10景のように３景、10景、12景、16景などの景勝についての記録もある。

このような記録は、朝鮮民族の中には、古くからわが故郷の美しい景色に深い愛着を持ち、代々広く誇りとした良風が根付いていたことを語っている。

万景峰

万景台の地名の由来と和村10景

万景台という地名は、元来の万景峰を呼び直した名である。

18世紀に編纂された『和隠集』によると、万景峰が大同江と順和江、普通江が落ち合う所である南湖の沿岸一帯に位置していることで、最初は万景峰を含むこの一帯を南湖と呼び、万景峰は南山と読んでいた。

そのうち峰の地勢が高い崖をなしながらも頂上は平

坦で、あたかも精巧な楼台を思わせ、さらにその上に立てば四方10里に広がるよろずの景勝を一望のもとに見晴らせるとして万景台と呼ぶようになった。

万景台という名はその後万景峰のみでなく、周辺の地域をも含む地名となった。

朝鮮人民は久しい昔から万景峰を含む南湖一帯の優れた風景を平壌８景の一つ（車門渡しの舟遊び）に数え、ひいては万景台から見渡される全般的な景勝を「和村10景」と名付けてたたえた。

和村10景は、万景台の春景色、３島上の月見、鳳浦の漁取り、牛山の牛の放牧、広村の夕煙、石湖の帆掛け舟、羊山の青い精気、猿岩の赤の壁、楸郊の種まき、東林渡しの送別である。

ここで３島とは万景峰の前の大同江上に浮かぶトゥル島、斗団島、文鉢島であり、鳳浦は昔万景峰左側の鳳凰台の前にあった渡しの名であり、牛山は現在の万景台区域元魯里の車哥谷と思われるが、以前ここで放牧を盛んに行っていたので一名チムスンゴル（家畜谷）とも呼ばれた。

さらに広村は順和江西方の万景台区域大平洞にあった広灘洞であり、石湖は普通江が落ち合う地点にあった渡しで、ここに石湖亭とよばれるあずまやがあった。

羊山は今日の万景台区域龍峰里の羊山であり、猿岩は万景峰上からじかに見える楽浪区域猿岩山の際の絶壁である。

ほかに楸郊と東林はそれぞれ万景台区域金泉洞の楸子原と万景峰のふもとにある東林桟橋を指す語である。

和村10景はいずれも独自の美を持ちながらも、全体的には万景台一帯のよろずの風光をたたえ、この山勢秀麗な地で暮らす人たちの多情多感な人情の世界と高尚な生活への志向を豊かに反映していることが特徴的である。

古文書には和村10景について、「平壌一帯の山水はいずこも優れてはいるが、和村一円こそその風光は最

万景台の南里

高」をなしているとし、とりわけ万景台の絶景を「国の中でこのような地は二つとないと言っても過言ではなかろう」と書かれている。
　このように万景台は山川の風光が麗しく、古くからその名が広く知られていた。
　この絶景の地に、社会主義朝鮮の始祖金日成主席は1912年４月15日に誕生した。

白頭３景

　白頭３景は以前、白頭山一帯に特有の自然風景を代表するとされた３景である。
　1931年の安在鴻の著『白頭山登陟記』には、白頭３景は白頭連峰と天池の荘厳な景観、無頭峰上から見る大展望、清澄秀麗の三池淵の美であるとされている。白頭３景については、18世紀の朴琮の『白頭山紀行』、徐命膺の『白頭山遊覧記』、洪良浩の『白頭山考』、成海応の『東国名山記』などでも特に強調されている。
　白頭連峰と天池の荘厳な景観は、万里の蒼空を衝いてそびえる白頭連峰の雄姿と、宇宙を懐に抱いているかのような天池の豪快な景観が一つに溶け合った荘厳で神秘ともいえる姿である。
　無頭峰上から見る大展望は、無頭峰の頂から一望の

下に見渡す千古の大樹林と、それを取り囲む大小の峰々の雄姿の素晴らしさであり、清澄秀麗な三池淵の美は、白頭山を背景にして広がる三池淵の繊細かつたおやかで興趣をそそる風景である。

古文書には、白頭３景を指して豪放にして威容のある男性的な風貌と、清く優雅な女性的な美を兼ね備えた名勝中の名勝だとし、これを「神の霊妙な創造物」、「俗世に二つとしてない神秘な造化の妙」と称揚している。

会寧の地名の由来と会寧３美

会寧という地名は当地の峰である鰲山と関わっているが、高麗時代からこの地域は鰲山、会山などと呼ばれていたが、15世紀初め会寧と改められた。

会寧は地元の本来の名会山の「会」と、当地の鎮守府の名である寧北鎮の「寧」を取って付けた名である。寧北鎮は富寧の北方にあるという意味の名で、結局、会寧は会山と寧北鎮を持つ地という意味である。

会寧一帯は古くから白アンズと陶器で名を知られ、その秀麗な山川と並んで美人の多いことで有名であった。

会寧３美は、会寧の人たちが誇りとしてきたアンズ

の美、陶土の美、女性の美、つまり白アンズ、会寧陶器、美人を誇る言葉である。

会寧地方の名産として知られる白アンズは、水分と糖分が多く酸味が少なくて香りが良い。

会寧陶器は良質で色が奇麗だとして、昔から隣国に多く輸出されていた。

会寧地方は先にも述べたように際立った美人の多いことでも有名である。

会寧は抗日の女性英雄金正淑（キムジョンスク）女史が生まれた由緒ある土地である。

会寧の白アンズ

朝鮮の名勝と由来

執　筆　：　朴吉男

編　集　：　朴成日

翻　訳　：　金時習、金光哲

発行所　：　朝鮮民主主義人民共和国
　　　　　　外国文出版社

発　行　：　チュチェ108(2019)年10月

E-mail：flph@star－co.net.kp

http：//www.korean-books.com.kp